

# 古河歴史見聞録

## 気温を記録する家老鷹見泉石

### 気象学のさきがけ

英国ロンドンで製造された「寒暖計」が、当館に存在します。ファーレンハイト(華氏温度)とレオミュール(列氏温度)の目盛を持ち、今も気温を測ることが可能で、この古河藩家老の鷹見泉石によるおよそ二百年前の収集品は、国の重要文化財に指定されています(12月21日まで展示室Iで公開中)。

この寒暖計を手に入れた年代は未詳ですが、泉石はこの寒暖計を用いて気温の計測を重ねました。泉石の伝える125冊の日記は、全体を通してその日の天気が記されています。ことに、天保7年5月21日(1836年7月4日)から嘉永5年3月2日(1852年4月20日)における日記は、寒暖計に対する泉石自身のコメントを交えて、計測時間とともにファーレンハイトによる気温が記録されているのでした。こうした寒暖計を用いた彼の記録は、いわば近代的气象学の濫觴に当たるといってよいのかもしれませんが。

### 鷹見泉石の気象記録

泉石により寒暖計を用いた計測がおこなわれた期間はおおよそ16年間。観測地は、古河、江戸、大坂、京都でした。記録上の最低気温は、弘化5年1月14日(1848年2月18日)付の古河における日記の「朝十二分ヨ、五過より雪、夕止」というもので、朝十二分の表記は華氏12度のこと。ちなみに撰氏に換算するとマイナス11.1℃になります。この古河における記事から8時頃から夕方まで降雪があったことがわかります。

蛇足ながら、幕府を大いに動揺させた大塩平八郎の乱前日、天保8年2月18日(1837年3月24日)の気温は、華氏42度(5.56℃)、平八郎を捕縛した同年3月30日(5月4日)は華氏51度(10.56℃)と記録があり、いずれも季節外れの低温による飢饉の影響を垣間見ることができそうです。

一方、最高気温は、弘化3年7月15日(1846年9月5日)の江

戸における記事「晴、九十八分弱」で、撰氏36.67度に当たります。泉石は、寒暖計による気温の観察を1600回以上も行っており、そのうち30℃を超える記録は128日間確認されているものの、35℃以上の気温はこの一度きりでした。

### 猛暑に悲鳴をあげる泉石

翌々年の嘉永元(1848)年、古河における日記には、体感的に厳しい暑さが続いていたようで、7月9日(8月7日)の「今日酷暑也」とか、同月11日(9日)の「今夕暑甚し」等の文字が散見されます。同16日(14日)の日記では、「暁雨曇晴、朝八十分弱、八時八十分弱二候へ共、九十四五分余之大暑也」とあって、八時(14時頃)華氏89度弱であるが体感的には94、95度余り(34.44、35℃)の大暑である、と嘆息まじりに記録している。



▶嘉永元年7月16日の観察記録(鷹見泉石日記)

るのでした。空調設備のない江戸時代、35℃を超える気温は、耐えがたいものであったに違いありません。

**泉石の気象記録が示唆するもの**

古河における令和4年7月1日から8月31日の最高気温の平均値は32.35℃。酷暑の夏と泉石が体感していた嘉永元(1848)年7月、8月の平均気温は30.17℃、弘化4(1847)年の数値28.38℃、さらにその前年は27.4℃であると、泉石日記のデータから平均値を求めることができます。今年の値とそれぞれ比べると、嘉永元年との差は2.18℃、前年の弘化4年の数値と3.97℃、同3年の平均値とでは4.95℃も上昇していることがわかります。

泉石が伝える気温の記録は、さまざまなことを推測させる側面が多く、近年の気象変動を考える上で示唆に富むものを大いに含んでいるといえるでしょう。

古河歴史博物館学芸員 永用俊彦

### 【一般書/随筆】

#### 折れない言葉

五木寛之 著

「人間万事塞翁が馬」「経験は、人生を狭くする」「死とは元気に帰ること」「渡る世間に鬼はない」…。作家・五木寛之が日々を生きるなかで、大きな支えとなった言葉を選び、感想をつづる。

出版社…毎日新聞出版

### 【児童/絵本】

#### ありがとうなかよし

しもかわらゆみ 作

おととつと！ ある日、石につまづいて転びそうになったところを、とかげくんに助けてもらったねずみくん。お礼にきれいな花をあげると…。「うれしい」気持ちを分かち合うふたりの、出会いから仲良しになるまでの物語。

出版社…講談社

## 図書館の本棚から



古河図書館

### 【一般書/小説】

#### 泣き虫先生

ねじめ正一 著

感動屋の「泣き虫先生」と少年野球チームの監督「チビカン」、バッテリーを組む卓也と清田。揺れ動く少年の心、迷い戸惑う大人の心。市井の人々の心の機微をていねいに描く。

出版社…新日本出版社

### 【児童書】

#### 草のふえをならしたら

林原玉枝 作

お味噌汁を作っているまこちゃんが、ふと思いついてねぎの青いところを笛のように鳴らすと「特技は味見」というブタが現れて…。8種の植物の笛の音色が結ぶ、子どもたちと動物との交流の物語。

出版社…福音館書店

### 釣り 昭和32年3月



## ファインダー越しの昭和時代

Time Travel Photographer

当時の男の子の遊びといえば一番が魚釣り。学校が終わると一目散に小川や沼に向かったものです。身近な自然が遊び相手だった時代でした。

古河市在住写真家 鈴木路雄さん

